

過言ではない。

当室では 2012 年からアダム・スミス文庫の保存と学術利用についてあるべき姿を模索するとともに、社会思想・経済学史にかかわる内容面の研究と、アダム・スミス旧蔵書としての書誌学的、古書冊学的研究の両立をめざしてきた。このなかで水田先生には本誌第 3 号に「ホブスからスミスへ」と題して寄稿いただき、その後も折に触れてご教示・ご助言をいただいている。

2020 年には新渡戸稲造からアダム・スミス文庫が寄贈されて 100 年を迎える。その時をお元気な姿で、私たちと一緒に迎えていただけることを願ってやまない。

アダム・スミスに関連して、2017 年は Dr Nicholas Phillipson、Dr Craig Smith という 2 名の外国人研究者を当室にお迎えすることができた。しかし、残念ながらフィリップスン博士は 2018 年 1 月 24 日に癌のため逝去された（享年 80）。

6 月に来室された際には、お元気そのものにみえ、収蔵庫の中でアダム・スミス文庫の書入れについて、ご自身の考えることを余すこと無く教えていただいた。次回はぜひイギリスでお会いしたいと会話したのが最後であったが、その約束は果たせぬこととなってしまったのが悔やまれる。心よりご冥福をお祈りしたい。

本号ではこのほか、室員の関係する外部資金にかかわる論考や報告を掲載した。いずれも対象資料を実見し、データをできるだけ多く集積・分析するという、帰納法的研究である。当室の日常も大量の資料やデータとの格闘が常であって、傍から見れば、愚直以外の何者でもないかもしれない。しかし、不慣れな演繹仮説型の研究を真似るより、多くの事実の積み重ねから一つの真実を見つけることの方が重い研究であると信じて日々努力しているし、今後もそうありたいと思うのである。 (小島浩之)

編集後記

本号巻頭は、2014 年に行った水田洋博士へのインタビューを座談会風に編集したものである。

アダム・スミス文庫は本研究科の至宝とも言われ、学部創設以来、大切に扱われてきた。関東大震災と第二次世界大戦を乗り越え、昭和 30 年代には大規模な修復も施された。しかし、昭和の大修理から既に 60 年余りが経過し、経年による傷みも随所にあらわれている。また、大切にすあまり収蔵庫の奥深くにしまわれて、研究資料でありながらほぼ手つかずであったといっても